

超えられるか自分

升島 努

星野彩さんが、あんなに若くして、ガンで私達がもう話しかけられない人となってしまった。未だに信じられない、受け入れたくない現実である。あの明るく朗らかで、誠実なあの子を、なぜ神は奪ったりするのか。その空しさと無念さ・・・、しかし、彼女の闘病中の苦しさや辛さ悔しさは、想像をはるかに絶するものであったろう。大きな不安やふとよぎる悲しさを振り払いながら、壮絶な戦いを続けていたに違いない。天国から見ているかな、彩。僕らは決して君を忘れない。

ここまで生きさせてもらっている自分、最近いつも「何よりも自分との戦いだ」、と良く言う。その瞬間、心はたちまち晴れる。甘える自分、頼る自分、怒る自分、嘆く自分、いらいらする自分、色々な事を周囲に塗りつけている自分を見る。人間社会に存在するから陥りやすいそれらの自分を「超える自分」、それが今のテーマである。そんな時、ふと大空を見る。愚かになりがちな人間の社会に、全く無関心な様に、泰然自若と、雲はゆったりと雄大に西から東へ動いている。人も社会も、こんなに大きな存在であれば、今世界の、日本の、日々の、くだらないトラブルは無くなるだろう。人間は、人間の中でそれほど小さくなりがちだ。それを乗り越える時の自分のマジナイである。

今、日本という社会も、大きく揺れているように見える。世界が激しく動いている中、日本の特質・本質を見失い、未来を見失いがちな今日である。政治が未熟なこの国、政治家だけでなく、大学でもただ長になりたいと言う人物が社会を動かそうとするから、その無能さの犠牲に社会はなる。本人は気付かない見苦しい姿を見せることになる。社会は人のために人が作ったもの、人が作った仮の器でしかないと思えば、如何にもろい存在であるかが分かる。その器の中で、夢を大切に、自分を乗り越え、何かをなし、それに歓喜し、たまたま直接間接に1人でも多くの人を幸せにすることができたら。でも、それは生半可で出来るものではないと思う。

今、雲の上に上がった。アメリカ行きへの国内線の翼の上に居る。緑豊かな中国山脈の山また山、続く山筋、その上に刷毛でタッチした様な白い秋の雲が所々に続く。この日本、空はるかからこうして見る日本は、何事もなくたたずんでいる。そう問題は人間なんだ。町々が所々に見える。あそこで、ここで、様々な人間模様が営まれていると思うと、その基本的な人生への考え方が大事なのだと思う。目先のお金、生きて行く為の単なる道具にしか過ぎないお金を、いつの間にか目標と間違え、振り返るとむなしい人生を送る人もいるかもしれない。経済といえば偉そうであるが、人が生業

でできた成果を、いつか人は物々交換するようになった。そのありさまが、形を変えて、物質の交換となり、それらを客観的に捉えることから経済という概念はできたのではないのか。今は、物々交換が形を変えているだけと思えないだろうか。産業革命のお陰で、人はチャンプリンの風刺するがごとく、歯車の中で振り回される存在になったかもしれない、しかし昔と少し違うのは、物々交換するものが、すこし高度？で、簡単には一人ではできないものになったのかもしれない。その中で、人は昔とは違った自己実現の仕方ができるようになった。体と知恵を使って作った野菜や狩りで仕留めた獲物の代わりに、頭を使って仕掛けや仕組みを考え、それを形にする、実行するなどという、高等？な事ができるようになった。そんな地球の上の人間社会に、今私たちは居るのだと言ったら間違いだろうか。

今も昔も、温暖化されてしまったとはいえ地球はほとんど変わらず存在する。変わったのは人間であると地球は言うかもしれない。いや彼はそんなちいさな事は言う気も持っていないかもしれない。それに対して、人間は、やれ中国が侵略して来た、いや日本がけしからん、韓国は手ごわくなって来た、あのリーダーはさすがだ、それに比べて何だ日本は、腰ぬけだ、ビジョンも無い。地球はそんな人間社会の喧騒をどんな思いで見ているのだろうか。アリさんには悪いけれど、アリの社会みたい？いや、アリも「失礼な！われわれは人間の様な、タチの悪い生き物ではないよ」そう言うかもしれない。待て待て、これは日本だけで、アメリカでは、そんなに人がどうだこうだと言わないぞ、他人の事をとにかく言うのは、日本人が一番だと。やれやれ、人間様は大変だ。でもお互いの心が通じ合った時、人間ほど素晴らしい存在はまた無いかもしれない。

自分を超えるということは、人間を越えるという事になるかも知れない。今回は、空の上から地球を覗いて、すこし人間社会から離れた視点から見てみた。時には、こんな視点も、自分を救い、伸ばし、豊かにする時に役に立つかもしれないと思いながら。

教室は、お陰さまで順調に推移しています。一年延びて、退官まで、あと2年となり、ここに来て、研究も、また色々な周辺も、大きく前進し始めて来ている。来年4月から理研・阪大の進める国家プロジェクトの中に、1細胞分析が参画する事になり、大阪大学の外部施設内(阪急山田駅の近く)に、1細胞分析と1分子イメージングの研究者たちが一堂に会した拠点ができることになった。教室に創った1細胞分析センターとともに、教室員の多くが、この両拠点を行き来する事になると思います。すでに、Orbitarap 3台、タンデムMS 2台の発注を済ませた。ここは、全国の研究者にオープン

ンにするつもりでも居ます。皆さんの中で、1 細胞だけでなく、最高感度、あるいは最高分解能で質量分析したいと思う方は、遠慮なく来て使ってください。

1 細胞分析法も、9 月末に、製薬企業様を中心に東京国際フォーラムで最新成果を公開し、その可能性検証のキックオフをした。日本で生まれた技術を、まず日本の産業の為にという思いからですが、製薬企業の皆様もそんなに余裕があるわけではないかもしれない。どこまで我々が育てられるかにもよるかも知れないけど、ともあれ、まずは日本の企業の皆様に公開しホッとしています。すでに欧米の製薬企業からも、講演してほしいとの誘いがあるのを、来年の ASMS 学会の前後に延ばしてもらいました。

5 月に、自分が以前留学したソルトレークで開催され ASMS (アメリカ質量分析学会) に、教室ほぼ全員で参加し、1 細胞分析法を中心に、20 題一気に発表しました。本多さんの仕事を引き継いで指の汗一滴の分析を発表した平本さんが、Under Graduate Competition で選ばれ、賞を貰いました。多分日本人では初めてではと思いますが、あらかじめの連絡も無く、半分あきらめていたら、受賞発表の時に誰も出て居なくて、大失敗もしました。職員にも負けない位良く頑張った学生諸君にとっては、6000 人余の沢山の専門家の集まった大きな会場での発表は大変な事だったと思いますが、ソルトレークでもめずらしい5月の降雪や、スノーボードスキー場で残雪と戯れた事などの思い出とともに、アメリカの大きさ、空気の違いなど、良い経験になったのではと思います。願いは、これからの日本の若者には、いつも世界の上に自分を置いて、物事を考えて欲しいという事です。その一歩にしてもらえたら幸せです。

全く異なった事も後の新聞記事の様に、地元の産業界とやっています。やらずもがなの、余計なお世話を、ついついアイデアが出て、やってしまいます。それが何やら大きな反響を呼び、複雑な心境ですが、自動車という、社会の人と直接もの作りを通して語り合う「もの」は、社会を学ぶ意味でも、自分をまた大きくしてくれていると思っています。人の輪の広がりも楽しいものです。

どうか皆様、心を大きく持って、いつも他人ではなく、自分を超えるんだと思って、人間社会を超えて、進んで見て下さい。悩みが消え新しい発展があるかも知れません。

少し早いですが、来年の皆様のご多幸を祈ってやみません。

平成 22 年 11 月吉日 アメリカ行きの機上にて